

# 中島町宮前熊甲神社遺跡・土川遺跡

能登海浜・縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

1985

石川県立埋蔵文化財センター



# 中島町宮前熊甲神社遺跡・土川遺跡

能登海浜・縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

1 9 8 5

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

- 1 本書は、能登海浜・縦貫道建設工事に關する埋藏文化財緊急発掘調査報告書の第5集である。
- 2 本書に収録したのは、石川県鹿島郡中島町に所在する熊甲神社遺跡と土川遺跡の2遺跡である。熊甲神社遺跡については、発見時以降宮前B遺跡として扱ってきたが、本書では所在位置や遺跡の内容を考慮し、名称を変更したものである。御了解願いたい。
- 3 調査は、昭和49年度と51年度に石川県土木部有料道路課（当時）の委託を受けて、石川県教育委員会文化財保護課（当時）が実施した。資料および出土品整理、調査報告書の刊行については、機構の再編もあり、土木部道路建設課の依頼を受けて、石川県立埋藏文化財センターが昭和59年度に実施した。
- 4 調査は次の職員が担当した。（ ）は現在の職名。  
熊甲神社遺跡……………平田天秋・湯尻修平・三浦純夫（以上県立埋藏文化財センター職員）・木越隆三（県立金沢錦丘高校教諭）  
土川遺跡……………高橋 裕（県立郷土資料館学芸員）・塩川義雄（県立門前高校教諭）
- 5 調査・資料整理および本書の作成にあたっては、唐川明史氏（石川考古学研究会幹事）、中島青少年考古学研究会の指導と協力を得た他、次の諸機関および個人の指導と協力を得た。記して感謝したい。（ ）内は当時。敬称略。  
石川県土木部道路建設課（有料道路課）・石川考古学研究会・久麻加夫都阿良加志比古神社・中島町宮前区・中島町土川区・高堀勝喜・桜井甚一・宮本正照・小林忠雄
- 6 土川遺跡の報告については、高橋 裕氏にお願いし、熊甲神社遺跡出土の石器鑑定については金沢大学教授藤 則雄氏にお願いするとともに、それぞれ玉稿をいただいている。
- 7 本書の作成にあたっては、唐川明史氏ほか石川考古学研究会々員の各位、および埋藏文化財センター職員の指導・助言を得て、藤・高橋・湯尻が次のように分担執筆し、湯尻が編集した。  
第I章および第II章第1～2・4・5節——湯尻修平、第II章第3節——藤 則雄、  
第III章第1・2節——高橋 裕、第III章第3節——高橋・湯尻  
なお、原稿の執筆に際して、埋藏文化財センター次長橋本澄夫、同主事山本直人の各氏より有益な助言と、文献の提供を受けた。
- 8 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりとし、文章表現については、あえて統一をとらなかった。
  - (1) 挿図の縮尺は図内に標示した。
  - (2) 方位はすべて磁北を示す。
  - (3) 水平基準線レベルは海拔高を示す。

# 目 次

第I章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	(湯尻) 1
第2節 歴史的環境	( " ) 1
第II章 宮前熊甲神社遺跡	5
第1節 発見と調査の経緯	(湯尻) 5
第2節 縄文時代の遺構と遺物	( " ) 7
(1) 土壇群	( " ) 7
(2) 出土遺物	( " ) 13
第3節 石器の石質とそれに基づく石器圏	17
(1) 石器の石質決定の意義	(藤) 17
(2) 熊甲神社遺跡出土石器の石器圏	( " ) 18
第4節 中世の遺構と遺物	19
(1) 塚	(湯尻) 19
(2) 出土遺物	( " ) 22
第5節 熊甲神社遺跡についての考察	24
(1) 縄文時代の土壇群と出土遺物	(湯尻) 25
(2) 中世の塚と出土遺物	( " ) 25
第III章 土川遺跡	27
第1節 遺跡発見と調査の経緯	(高橋) 27
第2節 遺構	( " ) 27
第3節 遺構の性格	(高橋・湯尻) 30

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 熊甲神社遺跡調査対象区域図・調査区割図	9
第3図 熊甲神社遺跡縄文中期土壇群実測図	11
第4図 熊甲神社遺跡縄文土壇群断面図	12
第5図 熊甲神社遺跡出土縄文土器	14
第6図 熊甲神社遺跡出土石器	15
第7図 熊甲神社遺跡塚実測図	20
第8図 熊甲神社遺跡第1・2号塚実測図	21
第9図 熊甲神社遺跡出土和鏡、土師質土器	23
第10図 土川遺跡調査位置図	28
第11図 土川遺跡石室状遺構平面図	29
第12図 軽海中世墓第22号墓跡	31
第13図 柳田古墓	31

## 表目次

第1表 熊甲神社遺跡石器一覧	17
第2表 出土石器の石質とその最寄りの分布地	19

## 図版目次

図版1 熊甲神社遺跡その1	遺跡周辺の航空写真
図版2 " " その2	調査区全景他
図版3 " " その3	"
図版4 " " その4	土壇群
図版5 " " その5	第1・2・6号土壇
図版6 " " その6	出土縄文土器
図版7 " " その7	出土石器
図版8 " " その8	第1号塚全景他
図版9 " " その9	第1号塚にみられる磔
図版10 " " その10	第1号塚
図版11 " " その11	第2号塚他
図版12 " " その12	五桜花文鏡
図版13 " " その13	鉄鎌、土師質土器
図版14 土川遺跡その1	発見時の状況他
図版15 " " その2	発掘状況・石組み検出状況
図版16 " " その3	石室状遺構
図版17 " " その4	石室状遺構全景

# 第 I 章 遺跡の位置と環境

## 第 1 節 地理的環境

鹿島郡中島町は県の北部、能登半島の中央部に位置する。東は七尾湾西湾に臨み、能登島と相対し、北は鳳至郡穴水町、西は羽咋郡富来町・志賀町、南は鹿島郡田鶴浜町に接する。98.98km<sup>2</sup>の町域の大部分は標高300m以下の丘陵で占められるが、町の中央部には別所岳などの丘陵から流出して合せ流れる熊木川と、虫ヶ峰西麓に端を発する日用川が貫流し、七尾湾西湾に注ぐ。これらの河川流域に平地が形成され、熊木川下流域の中島に町の中心がある。

熊甲神社の所在する宮前は熊木川中流域の小集落であるが、背後の低台地に式内社である久麻加夫都阿良加志比古神社が鎮座している。この神社は熊甲社とも呼ばれ、熊木川流域16カ村からなる熊木郷の総社であり、特異な祭礼である「熊甲二十日祭」は国指定無形民俗文化財に、木造神像も国指定重要文化財に指定されている古社である。遺跡は久麻加夫都阿良加志比古神社本殿の背後、舌状台地の端部に位置し、標高約14mを測る。熊甲神社遺跡では、本文で紹介するように、中世の塚群を調査したのであるが、この遺跡が熊甲神社と深い関連をもって造られた遺構であることは明らかであろう。

土川遺跡は、熊木川の南に東西に貫流する日用川流域に位置し、水系を異にする。日用川は標高150m前後の丘陵に挟まれた中流域に小規模な平地を形成した後、一旦は狭小な谷合をぬって流れ、下流域では熊木川と同様な平地を形成している。中流域の平野部に土川地区の集落が散在しているが、土川遺跡はこの最も東側、日用川が丘陵に挟まれて貫流する端出地内の東側丘陵斜面に所在していた。日用川が谷を抜けると、豊田の平地を形成する。このように七尾湾西湾に臨む熊木川・日用川によって形成された平地は、古来、地域における最大の生産基盤となっており、次節に述べるような各時代の遺跡が集中して知られているのである。

## 第 2 節 歴史的環境

熊木川流域は律令期の郡郷制のもとでは、能登郡の熊来郷と呼ばれていたことが知られる。『万葉集卷十六』に能登国歌三首が載せられており、その中に『梯立の熊来のやらに新羅斧…』、『梯立の熊来酒屋にまぬる奴わし…』など熊来の地名が見え、天平20年(748)の大伴家持能登巡行の歌に『香鳴より久麻吉をさして…』の一首が見えている。古代からこの地域が奥能登方面への中継基地、更に熊木川沿いに富来や志賀方面へ至る陸街道の要所として、地理的・文化的に重要な位置を占めていたと考えられる。

縄文時代の遺跡は、久麻加夫都阿良加志比古神社の背後から東に続く標高約20mの低台地上に所在する谷内クラカケ遺跡や谷内ゼンコウジ田遺跡で、縄文土器片が採集されており、熊甲神社遺跡も一連の遺跡である可能性がある。宮前集落から熊木川沿いに3kmばかり逆上った平地



第 1 図 周辺の遺跡

の最奥部に、西谷内A遺跡がある。橋本澄夫氏によれば、「土器量に対しておびただしい数の中型打製石斧が採集されていたが、ここでも同質同形の石斧で占められており、石斧の製造址でないかとの印象をもったことがある<sup>(1)</sup>という。西谷内地区や河内地区では熊木川やその支流の小河川沿いの谷合いや台地上に縄文遺跡が存在しているが、本格的な調査が行われておらず、その内容について把握された遺跡は少ない。熊木川下流の低台地上に立地する桜林縄文遺跡は、昭和49年8月、宅地造成工事中に発見され、唐川明史石川考古学研究会幹事らによって緊急発掘調査が実施された。縄文時代中期の土壇群が発見され、縄文土器片、装身具（石製玉）1、磨製石斧1、打製石器2、石鏃1、磨石1、人骨片1などが出土している。唐川氏らはこれらの土壇を墳墓であると考えておられる<sup>(2)</sup>。桜林台地のすぐ下に中島フジノキ製塩遺跡が所在しているが、これに近接して水路工事の際に縄文時代前～晩期の土器や石斧が、須恵器・土師器と混在して再堆積したような状態で出土している。付近に縄文時代の遺跡が存在していたと推定されるが、同様な海岸部に臨む低地に形成された縄文時代の遺跡の調査例が近年増えてきており、前期の良好な資料をみた小牧大杉谷内遺跡もその一例である。唐川氏らによって昭和58年度に調査が行われたが、能都町真脇遺跡と同様に漁撈を基盤とした集落遺跡の好例であろう。

弥生時代の遺跡は極めて乏しい。可耕地の少ない能登半島では珍しいことではないが、分布調査が進めば、より実態が明らかになってくると思われる。小牧・外遺跡の外地区では中期初頭の柴山出村式土器が出土しており<sup>(3)</sup>、最近、熊木川河口付近では中期中葉（小松式）の甕1片が採集されている。熊木川流域の平地や海岸部に臨む小低地でも、弥生時代の遺跡が発見される日も近いとみられる。上町マンダラ古墳群は、2基の前方後方墳を含む発生期の古墳群である。1号墳は主軸長19m、2号墳は主軸長18mの小形の前方後方墳で、高さ1.5mの低いマウンドをもつ。熊木川流域での地縁集団が形成されていたことを物語っている。

古墳時代も後期の段階に至ると、急激に遺跡の数は増加する。熊木川流域では、下流域の丘陵上に殿山1・2号墳、浜田古墳群（8基）、山岸古墳群（39基）などの円墳で構成される古墳群が造られ、日用川流域でも河崎古墳群（円墳11基）などがある。山岸31号墳からは金銅装太刀などの豊富な副葬品が出土している。また桜林古墳は、横穴式石室を内部主体とする径30m以上の規模を有する、後期古墳としては半島でも最大級の円墳であったと推定されている。この他にも海岸部に臨む低台地には、木ノ浦横穴群（7基）や瀬嵐（8基）・種ヶ島古墳群（5基）など6世紀から7世紀前半にかけての群集墳が所在する<sup>(4)</sup>。山岸、木ノ浦、瀬嵐・種ヶ島の各古墳群の被葬者は、周辺に可耕地となる平地が極めて小さいことから、製塩や造船などに従事した海人集団ともいべき人々の族長クラスであったと考えられている。事実、外、瀬嵐、木ノ浦、山岸などでは古墳群に近接して6・7世紀頃の製塩遺跡が多く分布しているのである。

奈良・平安時代においても熊木川・日用川の流域を中心として、集落が点々と営まれている。このことは、先に触れた『万葉集』の歌や和名抄にある「能登国能登郡能来郷」などの記載から明らかであるが、本格的な調査を実施した遺跡は小牧・外遺跡など数カ所の遺跡にすぎない。したがってこの時代の集落遺跡の内容や実態について記すことは難かしいが、久麻加夫都阿良加志比古神社の背後台地から、ほ場整備工事中に発見され、十分な調査もなされず、工事区域内の%

が破壊された谷内ゼンコウジ田遺跡からは、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼などが多数出土している。<sup>(5)</sup>遺跡は東西約 180m、南北約 160mにも及ぶ範囲に広がっていた。隣接して所在する谷内クラカケ遺跡と合わせ考えると、この地域でも最大級の遺跡であったとみられる。実態が把握されないまま破壊されたことは、熊来郷の古代・中世史を探る大きな手がかりの一つを失ったことになる。重大な損失であった。

中世の熊木について、承久3年(1221)9月の能登国田数注文に「熊来院 本四十九丁九反六卅六六町四段ハ 同(承久)元年検定注定」と見え、<sup>(6)</sup>鎌倉初期には、古代「熊来郷」から豊田保などが分立したのち、残された郷が国衙領となっていたのが知られるが、貞応3年(1224)10月1日には、立券状を得て荘園化し熊来荘となった。当荘の惣荘鎮守が熊甲宮(現久麻加夫都阿良加志比古神社)であるが、先の能登国田数注文によれば、町域は鹿島郡笠師保・豊田保・熊来院と羽咋郡の鉦打村(現中島町)で構成されていた。当該地区の中世遺跡の考古学的調査は、上町マンダラ墳墓群や中島ノギヤチ遺跡、小牧・外遺跡などにすぎず実態も不明な点も多い。しかし、熊木川下流域の熊木地区には熊木城跡と殿山城跡が、同上流域の鉦打地区では西谷内城跡・枅形山砦跡・町屋堡跡が位置し、日用川流域には豊田町遺跡などがあって、それぞれの水系ごとに熊木・鉦打・豊田・笠師の四ブロックに区分されていたようである。このことは、「熊甲二十日祭」に代表される杵旗行事の分布圏とも奇しくも一致しているのである。<sup>(7)</sup>

#### 註

- (1) 橋本澄夫「中島町宮の前熊甲神社遺跡の調査」石川考古第103号(昭和51年)
- (2) 唐川明史氏の御教示による。
- (3) 浜野・谷内尾・米沢・村上『中島町小牧・外遺跡』中島町教育委員会(昭和56年)。本項は同書を参考にしたところが多い。
- (4) 各古墳群の基数については、唐川明史氏の御教示による。
- (5) 谷内尾晋司氏の御教示による。
- (6) 『中島町史(資料編)』第一節・社寺文書(昭和41年)
- (7) 橋本・関塚・唐川『国指定重要民俗文化財 熊甲二十日祭の杵旗行事 お熊甲祭』中島町教育委員会(昭和59年)

## 第II章 宮前熊甲神社遺跡

### 第1節 発見と調査の経緯

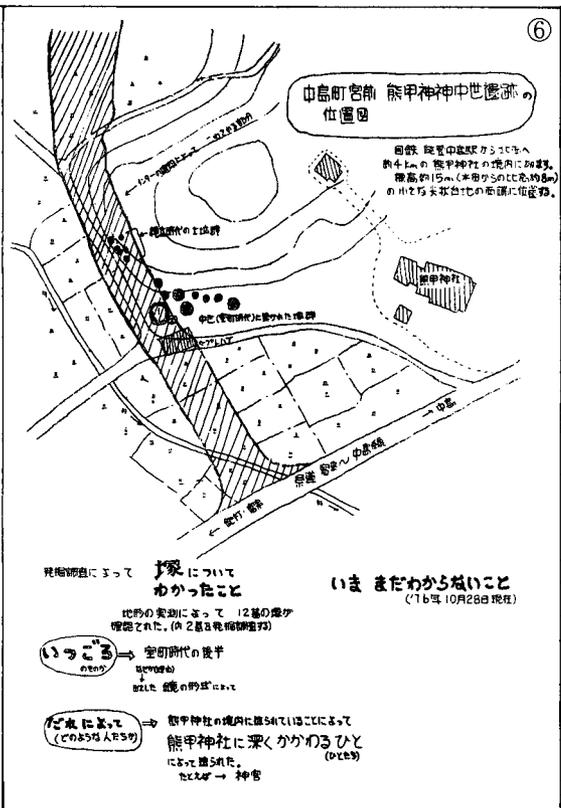
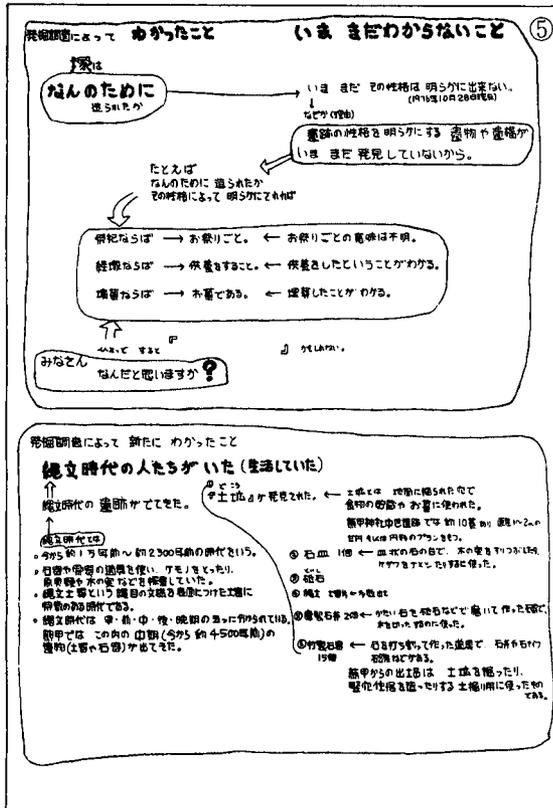
中島町在住の唐川明史氏は、石川考古学研究会の若手幹事の一人で、中島町商工会勤務の傍ら中島青少年考古学研究会を主宰されるなど、積極的な活動を進めてきておられる。中島町をはじめとする口能登地区の近年の考古学的成果の多くは、唐川氏らの活動によって挙げられたものといっても過言ではない。本遺跡の発見も唐川氏と中島青少年考古学研究会の朱戸定光君によってなされたものである。すでに能登縦貫道路の横田インターチェンジの取り付け路として決定し、樹木の伐採作業が進められていた久麻加夫都阿良加志比古神社境内西側部分で、分布調査を実施したところ2・3基の塚状の土盛りを確認するとともに、その土盛りの上から一面の和鏡と鉄製の鎌1点を発見した。発見は昭和51年7月29日午後6時頃であったという。この報告は翌30日、県教委文化財保護課（当時）に連絡があり、31日には新聞にも大きく報道されている<sup>(1)</sup>。文化財保護課は早速現地への職員の派遣を行うとともに、遺跡の保護について県有料道路課（当時）と協議を進め、事前の発掘調査を実施することで合意した。

文化財保護法にもとづく諸手続きは、8月3日付け有道発第102号で遺跡発見通知が提出され、これを受けて8月13日付け教文収第352号で発掘通知を文化庁に対して行っている。遺跡の発見地は中島町宮前ホ之部64-甲であった。発掘調査は10月5日から着手し、11月2日に完了した。調査は当初、平田・湯尻・木越が担当したが、平田・木越が他の現場を担当することになり、10月上旬から三浦氏（当時石川考古学研究会調査員）の応援を求め、唐川氏や中島青少年考古学研究会の協力を得て進められた。調査の対象とした面積は、700㎡と比較的小規模であったし、後述のように中世の塚を中心に発掘を進めたが、調査区の中央部で縄文中期の土壇群を発掘するなど予想外の成果をあげることができた。調査の期間中、唐川氏らにより発掘調査だよりNo.1と2が発行され<sup>(2)</sup>、10月31日には現地見学会を開催して多数の参加を得ている。

#### 註

- (1) 北国新聞昭和51年7月31日付朝刊
- (2) 次頁に見学会パンフレットを掲載した。





見学会パンフレット

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 土坑群 (第2・3図、図版4・5)

調査区域のほぼ中央にあたる台地の西側緩斜面に8基の縄文時代の土坑群が検出された。土坑群の位置は台地の頂部から比高差で約3m降った緩斜面にあたる。台地の先端部は台地の裾を迂回する農道によって一部削られた箇所もあるようで、急傾斜となっている。土の堆積は、台地頂部からの流土の関係で調査区の西側で少なく東側(熊甲神社側)では多い。また、土坑群と1号塚の間の平坦部でも土の堆積が厚く、地山面までには50~70cmの厚さの黒色土が堆積していた。遺跡の基本層序は、暗褐色を呈する表土層の下に黒色土があってその下は地山となる。黒色土や地山ローム層には、母岩である輝石安山岩の礫を含む箇所も所々にみられた。調査時における土坑の平面形の把握は、黒色土中では困難であったため、地山面まで掘り下げた時点での検出となった。そのため各土坑の規模や深さは、本来の数値より少さくなっている。

**第1号土坑** 土坑群の最も北に位置する。第2号土坑とは南に約30cm隔てる。平面形がほぼ正円形を呈する浅い土坑である。明確な底面を作らず鍋底状である。規模は上面で径200~220cm、底面で径70cm前後を測る。深さは25cmと浅いが、すでに触れたように黒色土中から掘り込まれており、本来の深さはもう15cmばかり深いものであったとみられる。土坑の東側の上面プランは、黒色土層の堆積が西側に比較して厚味をもっていったため、やや掘りすぎたきらいがあ

る。土坑覆土は、壁際に接して地山ブロックを含む濁黄褐色土が薄く流れ込んだ上に、柔らかくボコボコした手ざわりの黒色土が充満していた。覆土中には炭化物粒をわずかに含んでいる。縄文土器や石斧などの遺物は、いずれも坑底から15cm前後浮いたレベルでまとまって出土し、坑底に着く遺物は少量の土器細片のみである。第1号土坑からは次項にも触れるように、打製石斧13点と小形磨製石斧1点が一括して出土している。ただ残念なことに土坑の発掘時に担当者が塚の記録作業に追われていたため、立ち合いができず、石斧出土の確認時点ではすでにその殆んどが取り上げられていたことである。出土状態の復元も試みたが、旧状に復することはできなかった。遺跡の立地する台地の母岩は、露頭から輝石安山岩とみられる。調査時の所見と第3節に藤 則雄氏の石質鑑定の結果から打製石斧の大半および土坑覆土中に多く存在していた剥片はいずれも輝石安山岩と考えられる。とすれば打製石斧は第1号土坑の近辺で製作され、土坑に入れられたとする見方もできる。本例のように石斧を一括して納めた状態で調査された例は少ない。本県でも縄文時代後期の例ではあるが、野々市町御経塚遺跡で第6号住居跡の近くの浅い掘り込みに7本の打製石斧が一括集積された状態で検出されている<sup>(1)</sup>。いずれにしろ、第1号土坑での石斧の出土状況は、稀有な例といえ、土坑の性格を考える手がかりを与えてくれている。

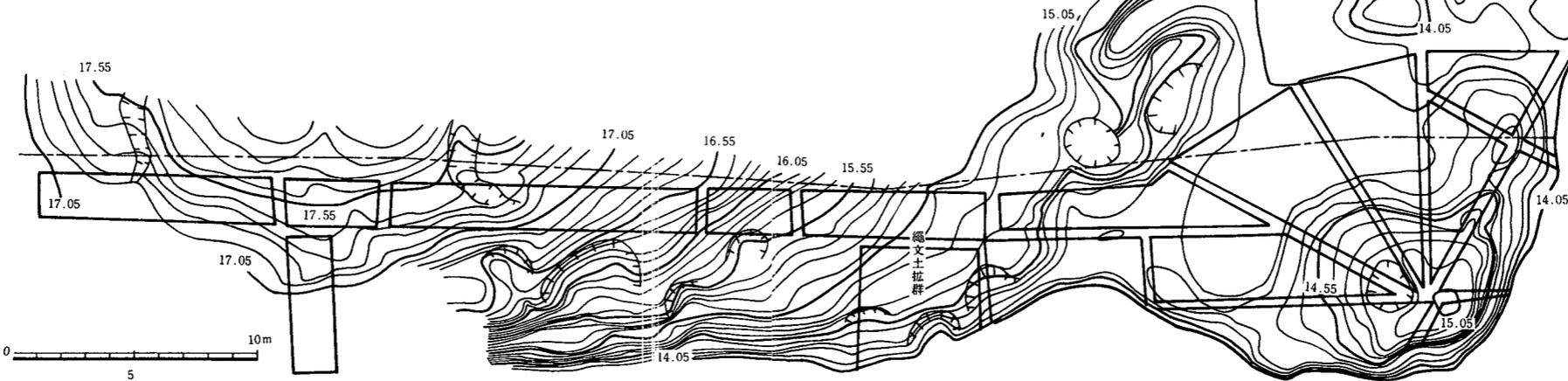
**第2号土坑** 第1号土坑のすぐ南に位置し、東約90cmに8号土坑が位置する。土坑は二段掘りの袋状を呈する。上部では長軸180cm、短軸150cmの浅い楕円形プランとなるが、中央部を長軸110cm、短軸80cmの胴張り長方形に掘り下げている。地山面からの深さは、約80cmを測り、45cm前後までの側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、それ以下は袋状となって10cmばかり広がる。坑底も水平ではなく、側壁の立ち上がりコーナーは明らかではない。覆土は袋状部に暗褐色の柔らかい土が充満し、底に近づく程炭化物粒の含有が多くなっていった。覆土の色調は上部程黒味を増しているが、土の状態はいずれも柔らかいボコボコした手ざわりである。土坑上面の浅い楕円形の掘り込みは中央に傾斜して袋状の坑内へ続いているが、地山の赤土を含んだ褐色味の強い粘質土であった。土の堆積状況からみると、初めに袋状の坑底に暗褐色土が堆積した後、楕円形の掘り込みが地山質の強い土によって埋まり、約 $\frac{1}{2}$ 程度埋没してから、中央の凹みに順次黒褐色土がたまって完全に埋まったと考えられる。しかし、中央部の覆土の質自体は同質とみなされ、土坑の埋まる段階的時間が隔ったものではなかったと推定されるのである。覆土中には輝石安山岩の礫が多く含まれ、大きい礫では径20cmに達する。縄文土器も少片であるが、覆土中に点々と含まれていた。

**第3号土坑** 調査区の西南部に集中して検出された3・4・5・7・8号の各土坑と一つのグループを形成する。4・7・8号の各土坑と重複するが、いずれも切り合い関係をおさえることができなかった。遺構が複雑に存在していたことと、後世の抜根等による攪乱を部分的に受けていたことによる。長径180cm、短径100cm（いずれも推定値）の長楕円形のプランとみられるが、坑底までの深さは15cm前後と浅い。他の土坑と同じく黒色土中から掘り込まれていたが、検出面ではすでに下げ過ぎの状態となったものである。覆土は他の土坑と同様に柔らかい黒色土で、坑底では地山質の暗褐色土が薄く存在する。覆土中には輝石安山岩の小礫が多く含まれ、縄文土器片も坑底から若干浮いた状態で断片的に出土している。

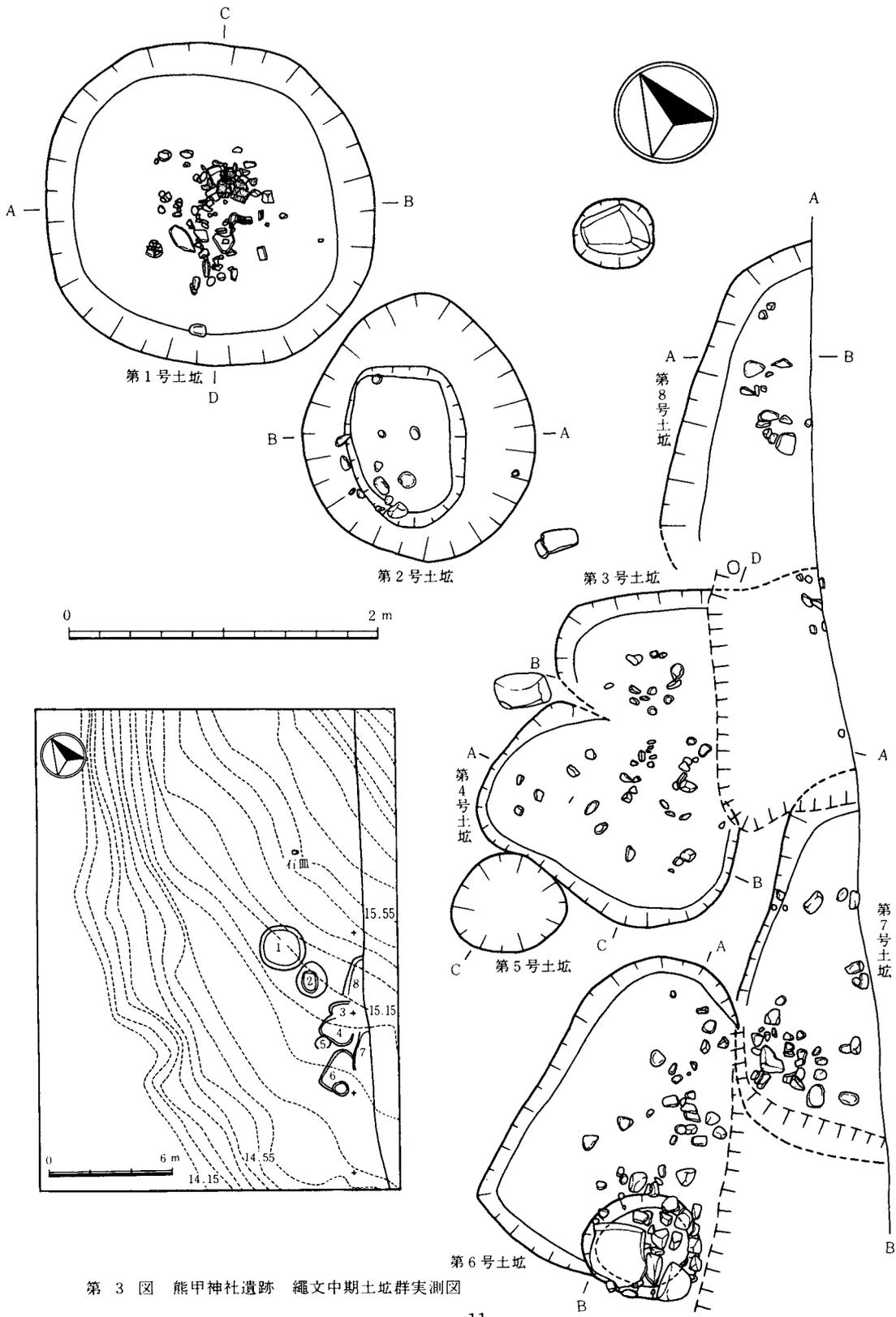
**第4号土坑** 第3号土坑に並列して重複し、第5号土坑の一部を切られている。長径 170cm、

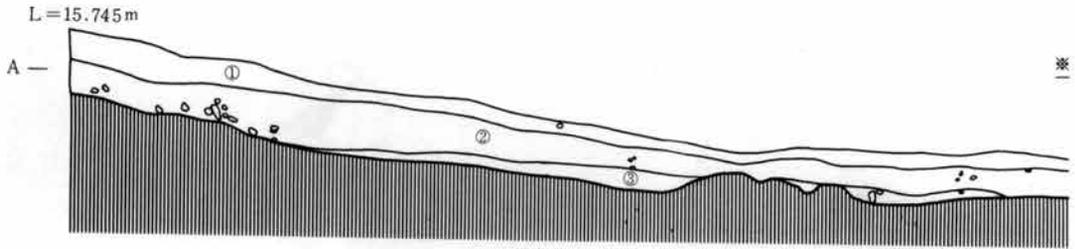


調査対象区域図



第 2 図 熊甲神社遺跡 調査対象区域図・調査区割図



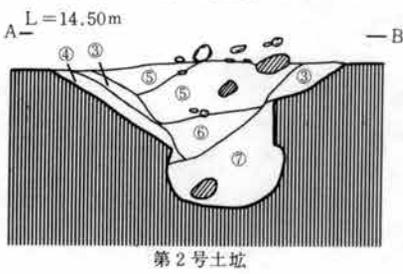
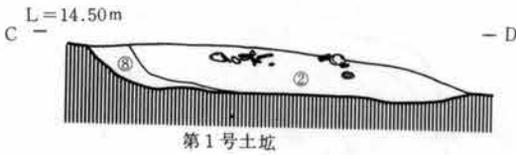
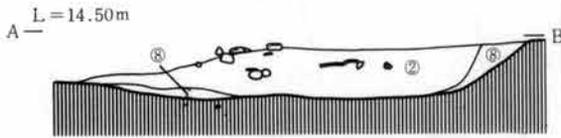
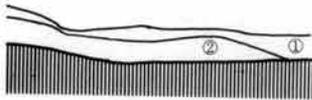


※

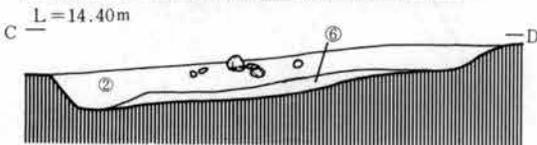
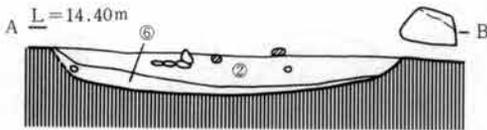
—B

西南壁断面図

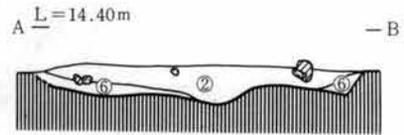
- ①表土
- ②黒色土(柔らかい)
- ③暗褐色土
- ④褐色粘質土
- ⑤黒褐色土(柔らかい)
- ⑥暗褐色土(柔らかい)
- ⑦暗褐色土(柔らかく炭化物粒多含)
- ⑧地山ブロックを含む濁黄褐色土
- ⑨炭化物単純層



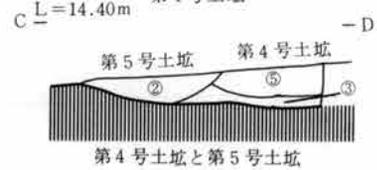
第2号土坑



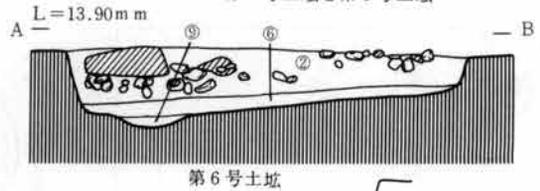
第3号土坑



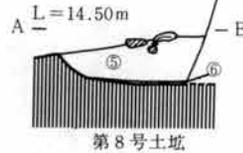
第4号土坑



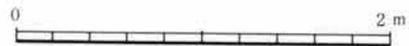
第4号土坑と第5号土坑



第6号土坑



第8号土坑



第4図 熊甲神社遺跡 縄文土坑群断面図

短径 110cmの長楕円形の土塚で、3号土塚と同様に浅い皿状を呈する。3号土塚の覆土と同質の黒色土で充満し、覆土中には多数の小礫が存在していた。縄文土器片の他、打製石斧1点が坩底から若干浮いた状態で出土している。

**第5号土塚** 第4号土塚に接して存在した径80cm、深さ14cmの浅い土塚である。土塚としたがその規模からみると土塚よりピットとして扱う方が適当であり、4号土塚を切っていたことから、後世に掘られた攪乱穴の残欠の可能性もある。覆土は柔らかい黒褐色土で、出土遺物はない。

**第6号土塚** 第4号土塚の西30cmに位置し、第7号土塚に接する。長径220cm、短径約140cmの長楕円形土塚であるが、東南側壁の大半が攪乱によって失われていた。坩底は東から西へ傾斜して、わずかに深く、最深部で37cmを測る。覆土は他の土塚と同質の黒色柔質土であったが、多数の礫が混在していた。土塚の東南部隅に一辺40cm程度の不定形な板石があり、これと礫群を取り除くと、坩底に径70×80cmのほぼ円形をした浅い掘り込みがあって、炭の層がつまっていた。このピット上面の礫の中には火を受けて焼けた石が含まれていたことから、ここで火を燃やした後、埋められたと推定される。柔質の黒色土である覆土中からは、若干の縄文土器片が採取されている。

**第7号土塚** 調査区内では全体の約 $\frac{1}{2}$ を調査した。第3号土塚と重複していた可能性もあるが、調査部分でも攪乱を受けていて明確なプランは不明である。ただ他の土塚との比較から、長径240cm、短径130cm程度の長楕円形の土塚であったとみられる。覆土の色調や土質は、他の土塚と変化なく、覆土中に多くの礫を含むことも同じである。深さも検出面からでは約23cmと浅いが、地表面からでは30cmの深さとなって本来は、もう少し深さがあったと思われる。覆土中からは若干の縄文土器片が出土している。

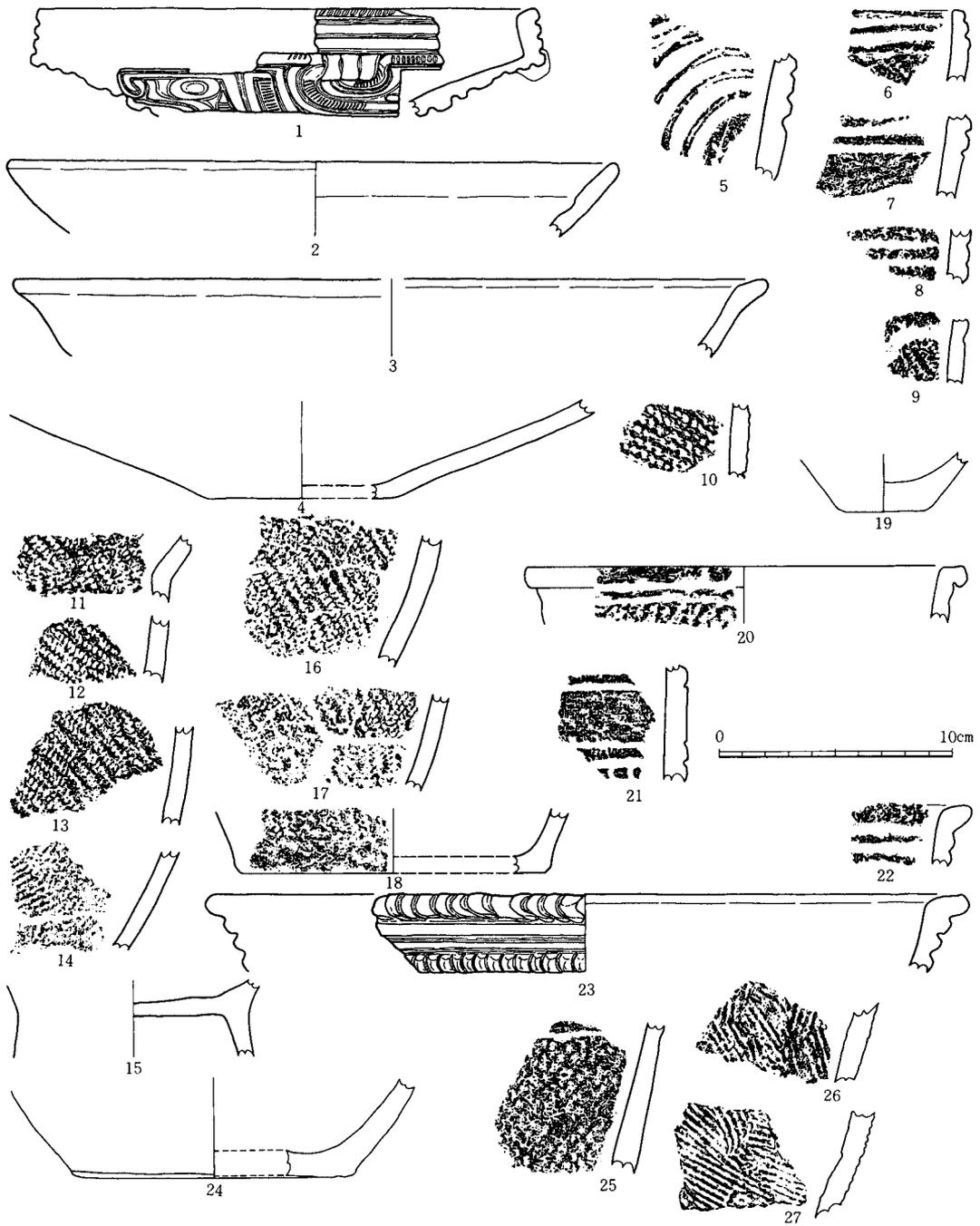
**第8号土塚** 第3号土塚の北東に、重複して位置する。明確な切り合い関係を把握することができず、調査も約 $\frac{1}{2}$ 程度を実施したにとどまったから不明な点が多い。それでも長径210cm前後、短径120cm程度の楕円形プランを呈した土塚と推定されよう。深さは約20cmと浅く、覆土の状態も他の土塚と同一とみて良い。縄文土器片若干の他、打製石斧1点が出土している。

土塚の説明は以上であるが、第5号土塚を除く7基の土塚群は、いずれも縄文時代に造られた遺構であり、次節で紹介する出土土器から判断すると、中期中葉頃に継続して掘られた土塚であることがわかる。7基の土塚のうち2基は完掘できなかったが、5基が長楕円形の浅い土塚、1基が円形の浅い土塚、残り1基が浅い楕円形の掘り込みを伴った二段掘りの袋状土塚と、形態的には分類できる。土塚の性格については改めて後述することにしたが、覆土の状態が共通する土塚が多く、第1号土塚や第8号土塚の例から、自然推積によって埋まったのではなく、人為的に埋め戻されたような印象を受けている。

遺構ではないが、第1号土塚の北東約3.5mの地山直上で、石皿が1点裏返しになって発見されている。付記しておきたい。

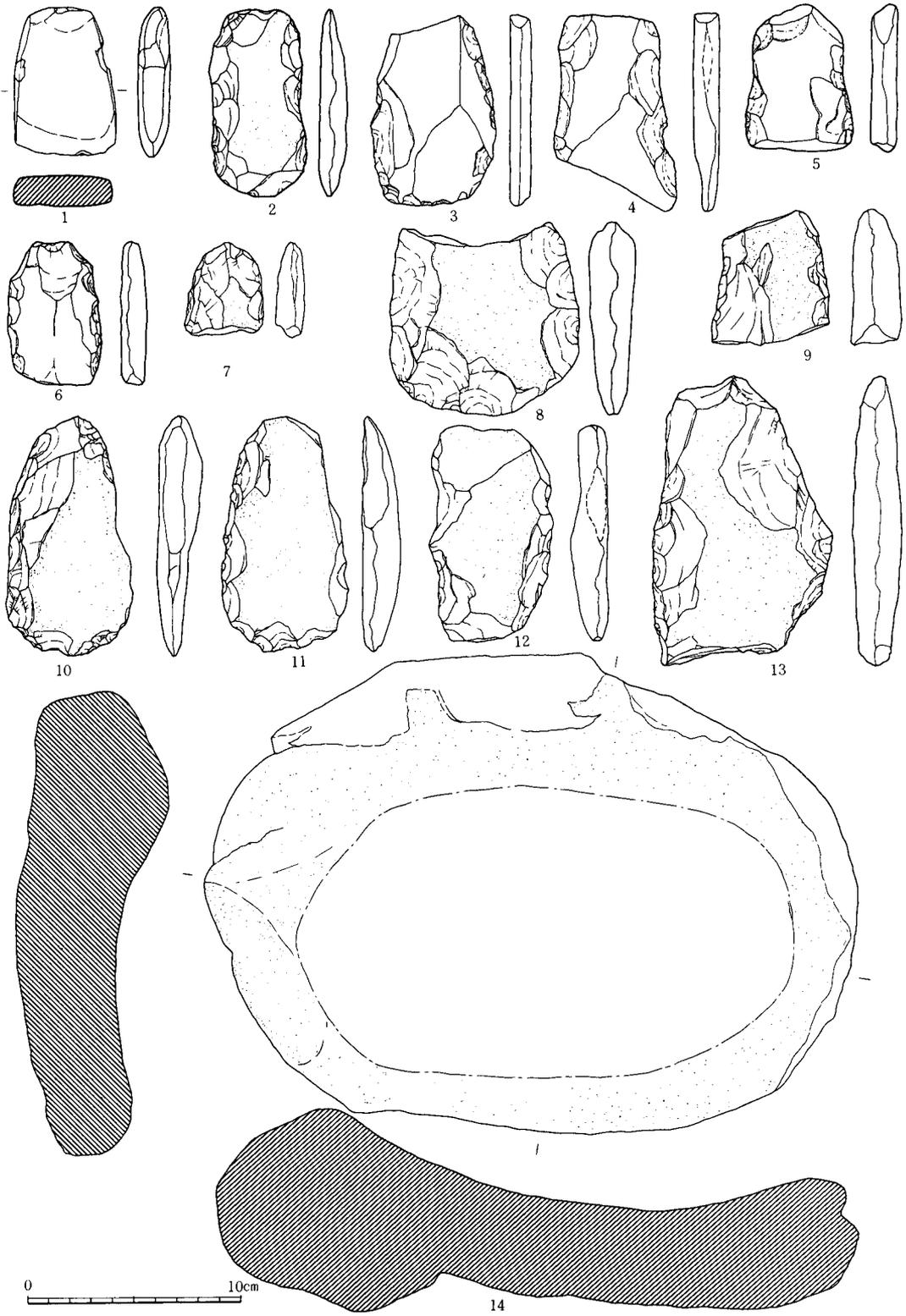
## (2) 出土遺物 (第5・6図、図版6・7)

**縄文土器** 縄文土器は、調査区中央部の土塚群およびその周辺部で集中して出土した他、第1号塚の北東裾部付近から断片的に発見された。土器量は少なく、全体でも約50片程度であり、し



第 5 図 熊甲神社遺跡 出土縄文土器

(1~18 第1号土壇、19 第2号土壇、20~21 第3号土壇、22~23 第4号土壇、24 第6号土壇、25~27 黑色土出土)



第 6 图 熊甲神社遺跡 出土石器  
 (1-5 第1号土坑、6 第3号土坑、7 第8号土坑)

かも無文であったり縄文地のみである破片が多いため、図示し得る土器は少ない。第1号土坑からは最も多くの土器が出土した。第5図の1～18がそれであるが、この他にも口縁部がキャリバー形に開く縄文のみを施した深鉢の大形破片が一個体分出土している。1は口径約21cmの深鉢口縁部で、口縁がくの字に内屈する。口縁帯には4条の半載竹管文がみられ、下顎部に同様な渦巻文がある。4条を単位とする隆帯の外側2条には細い棒による刻み文が施されることが共通する。渦巻文の左側には玉抱き三叉文がある。2・3は口縁が外反して開く無文の深鉢口縁部である。いずれも器面を強く横撫でしている。4は精製の深鉢底部であるが、器表が良く磨かれており胎土も良く深鉢の胎土や調整と異なっている。5は半載竹管で抉って隆帯をつくり出し、渦巻状の文様としている。6は口縁に2条の半隆起線がある。7・8も2条もしくはそれ以上の半隆起線がみられる。9は細文地に太い半隆起線がある。6～10はいずれも深鉢の一部であろう。10～18は縄文(LR)のみの深鉢で、11～15は同一個体、16～18も別の同一個体とみられる。11～15の破片から成る深鉢は、底部に脚をもつキャリバー形となろう。第2号土坑からも縄文土器片が出土しているが細片が多く、図示できた土器は19の底部1点のみである。第3号土坑から出土した縄文土器も20・21の2点にすぎない。20は口縁端を曲げて肥厚させた平口縁の深鉢で、口径は約18.5cmを計る。21には半隆起線に挟まれて無文帯が存在する。第4号土坑出土の土器も細片が多い。図示したのは、23・24の2点のみであった。23は口径約24.5cmの平口縁の深鉢で、太い半載竹管文をめぐらす。24は底径約12cmの深鉢底部である。25～26は黒色土中からの単発的に出土した土器の一部で遺構に伴わない。26・27には条痕調整が認められる。27では内面にも同様な条痕があるが、2点とも胎土中に多くの砂粒を含んでおり、他の土器とややおもむきを異にする。

いずれも断片的な資料であり、その編年的位置を述べるには慎重さを欠くが、第1号土坑の第5図1は小島氏の「上山田第Ⅳ様式」土器<sup>(2)</sup>、高堀氏の「上山田Ⅱ式」土器<sup>(3)</sup>の範疇に入るものと思われる。また、第3号土坑と第4号土坑の土器もこれに近い編年的位置に含まれるものとみたい。なお、黒色土中から単発的に出土した条痕調整の土器片は、中期の土器とみるには疑問であり、後期以降のある段階での深鉢であるとの指摘にとどめておきたい。

**石器** 調査によって出土した石器は、磨製石斧2点、打製石斧18点、石皿1点の計21点であった。しかし、担当者(湯尻)の不手際から埋文センターで収蔵している膨大な出土品整理箱の何処かに混入してしまい、その一部は現在のところ行方不明の状態になっている。申し訳のないことではあるが、計測図示したのは、磨製石斧1点、打製石斧12点、石皿1点の計14点にすぎない。しかも1号土坑から出土した13点の打製石斧のうち6点を図示できない。これらの石斧については発見し次第、発表の機会をもつことで御寛容願いたい。

第6図と図版7に示したのが、現存する全てである。1～5・9・13は第1号土坑から出土した。6は第3号土坑、7は第8土坑の出土である。計測値は第1表にまとめたが、次節で藤則雄氏が説明されているように、打製石斧は流紋岩製の1点を除いて輝石安山岩と凝灰岩である。石斧の表面は風化が進んで白灰色を呈している。打製石斧は8と13の2点を除けば、いずれも中小形の部類であり、完存する例からみれば長さ10～11cm前後、幅4～6cm前後、厚さ1～2cm前後となる。形態的には2・6のような短冊形のタイプと4・8・10・11・13のように撥形タイプに

分けられる。利用石材からくる印象であるかも知れないが、全体に厚さが薄いため、使用した場合にはとても壊れ易いように思える。磨製石斧は第6図1に示した小形品の他に、中形品が1点、磨製石斧は、第6図1に掲げた定角式の小形石斧の他に、第2号塚の北側から中形品1点が出土している。しかし、先に述べた理由から図示することができない。

石皿は、第1号土壇の北東約3.5mの所から単独出土している。出土時には裏面を上にして発見されたが、一部欠失していた裏面を除いてほぼ完存する。凹面は長径約24cm、短径約14cmを測り、やや片寄っている。

第1表 熊甲神社遺跡石器一覧

第6図No.	種類	長cm	幅cm	厚cm	重g	石質	遺存状態	備考
1	磨製石斧	7.1	4.8	1.5	95	流紋岩質火砕岩	完	遺物No.10 第1号土壇出土
2	打製石斧	10.0	4.4	1.3	55	輝石安山岩	完	遺物No.7 " "
3	"	(8.1)	5.9	1.1	67.3	" " *	頭部欠	遺物No.12 " "
4	"	(9.5)	5.7	1.2	69.1	" " *	頭・刃部欠	遺物No.13 " "
5	"	(7.1)	4.9	1.2	48.6	白色凝灰岩 *	刃部欠	遺物No.14 " "
6	"	(6.9)	4.4	1.2	36.5	" "	刃部欠	遺物No.4 第3号土壇出土
7	"	(4.5)	3.7	1.3	20.5	凝灰岩	頭部断片	遺物No.9 第8号土壇出土
8	"	(9.3)	8.9	2.2	207	輝石安山岩	頭部欠	遺物No.6 第2号塚付近出土
9	"	(6.4)	5.5	2.4	84.5	" "	刃部欠	遺物No.8 第1号土壇出土
10	"	11.5	5.9	2.0	134.5	" "	完	遺物No.3 黒色土中地山直上
11	"	11.2	4.4	1.3	55	流紋岩	完	遺物No.1 黒色土
12	"	10.3	5.9	1.8	113	輝石安山岩	完	遺物No.2 "
13	"	(13.8)	8.3	2.2	286.5	" "	刃部欠	遺物No.5 第1号土壇出土
14	石皿	30.5	23.3	9.6	6.950	安山岩	裏面剥落	遺物No.11 地山直上

\* 印は藤先生の鑑定結果にもとづく湯尻の判断による。<sup>(4)</sup>

註

- (1) 高堀・宮岸・塚野・米沢・湯尻『野々市町御経塚遺跡(第8次)概報』石川県教育委員会(昭和51年)
- (2) 小島俊彰「第5章縄文土器・土製品」『上山田貝塚』所収 宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会(昭和54年)
- (3) 高堀勝喜「第11章総括」『上山田貝塚』所収 宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会(昭和54年)
- (4) 湯尻の下手際から石器を紛失したが、本稿執筆中に新たに3点が発見された。石質の判定は藤先生の鑑定結果を参考にして湯尻が行ったものである。



#### 第4節 中世の遺構と遺物

(1) 塚（第7・8図、図版8～11）

能登縦貫道横田インターへの取り付け道路建設用地内に所在した塚は、調査の結果2基であったことが判明している。調査に際しては、台地端に位置する大きな塚を第1号塚、それに接する

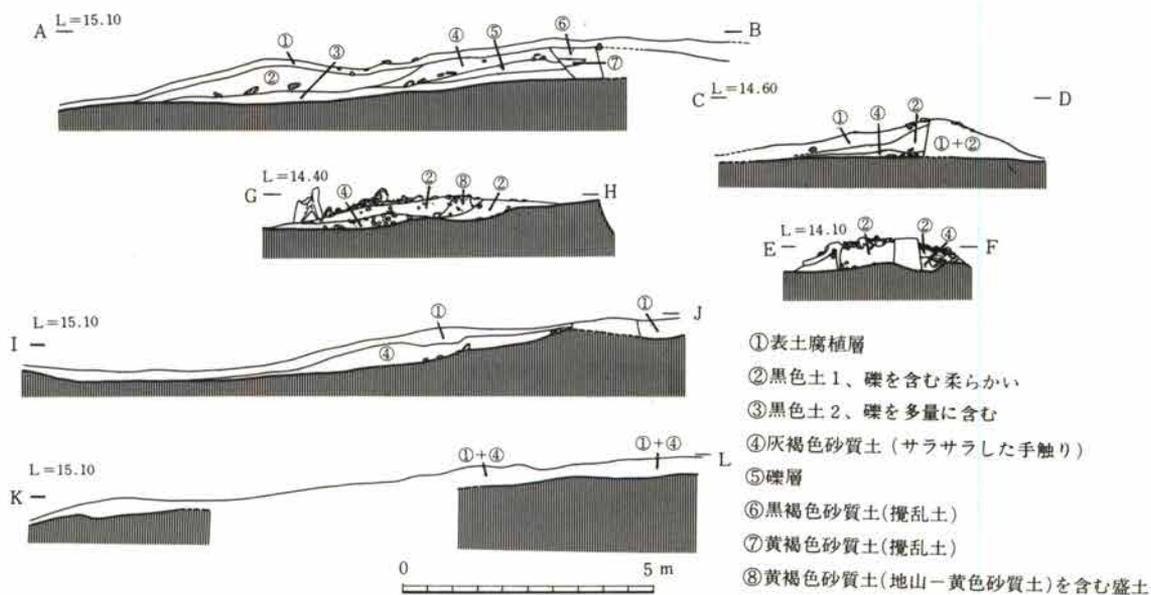
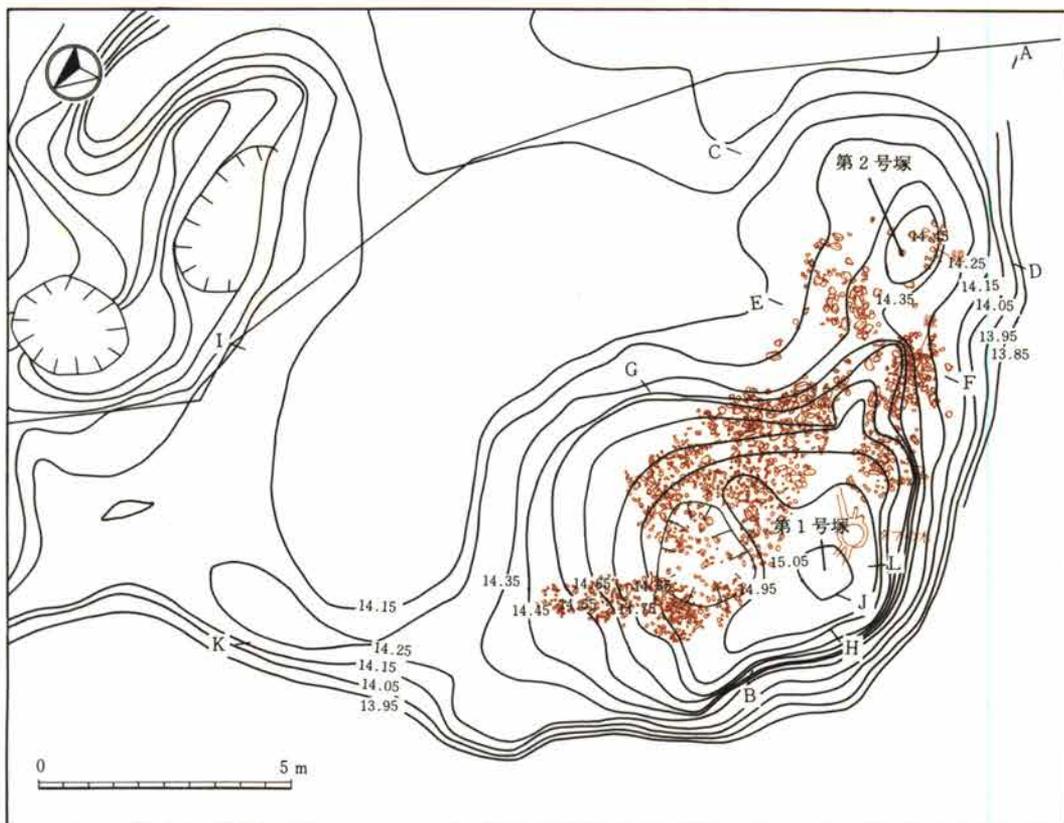
ような位置に存在する小さな塚を第2号塚と呼ぶことにした。唐川氏によって採取され、遺跡発見の端緒となった和鏡と鉄鎌は、唐川氏の教示と調査の結果から、和鏡が第2号塚のマウンド直上に、鉄鎌が第1号塚南東部裾に位置する礫群の直上から発見されたことが明らかとなっている。

発掘調査の過程において、路線外の久麻加夫都阿良加志比古神社境内の林地を踏査したところ、第1・2号塚の東方社殿に続く台地上に8基の低マウンドを確認した。宮司清水直記氏の快諾を得、作成したのが第7図である。台地の頂部まで踏査を実施したが、台地南縁部のこの区域にのみ、マウンド状の高まりを確認している。アテ（アスナロ）と低雑木からなる山林であったが、明らかに人工の手が加えられた遺構であると判断された。8基は塚と推定されたが樹木の根の盛り上がりと判別し難いような塚もあり、繁茂する樹木にはばまれて確認作業が充分に行えなかった所もある。

**第1号塚** 台地の南西隅に位置する。台地の下を通る農道によって塚の南側と西側の一部がすでに失われ、東側が全体の $\frac{1}{3}$ 程度残存したものと思われる。伐栽後の見かけでは約9 m×7 mの楕円形を呈していたが、発



第7図 熊甲神社遺跡 塚実測図



第 8 図 熊甲神社遺跡 第1・2号塚実測図

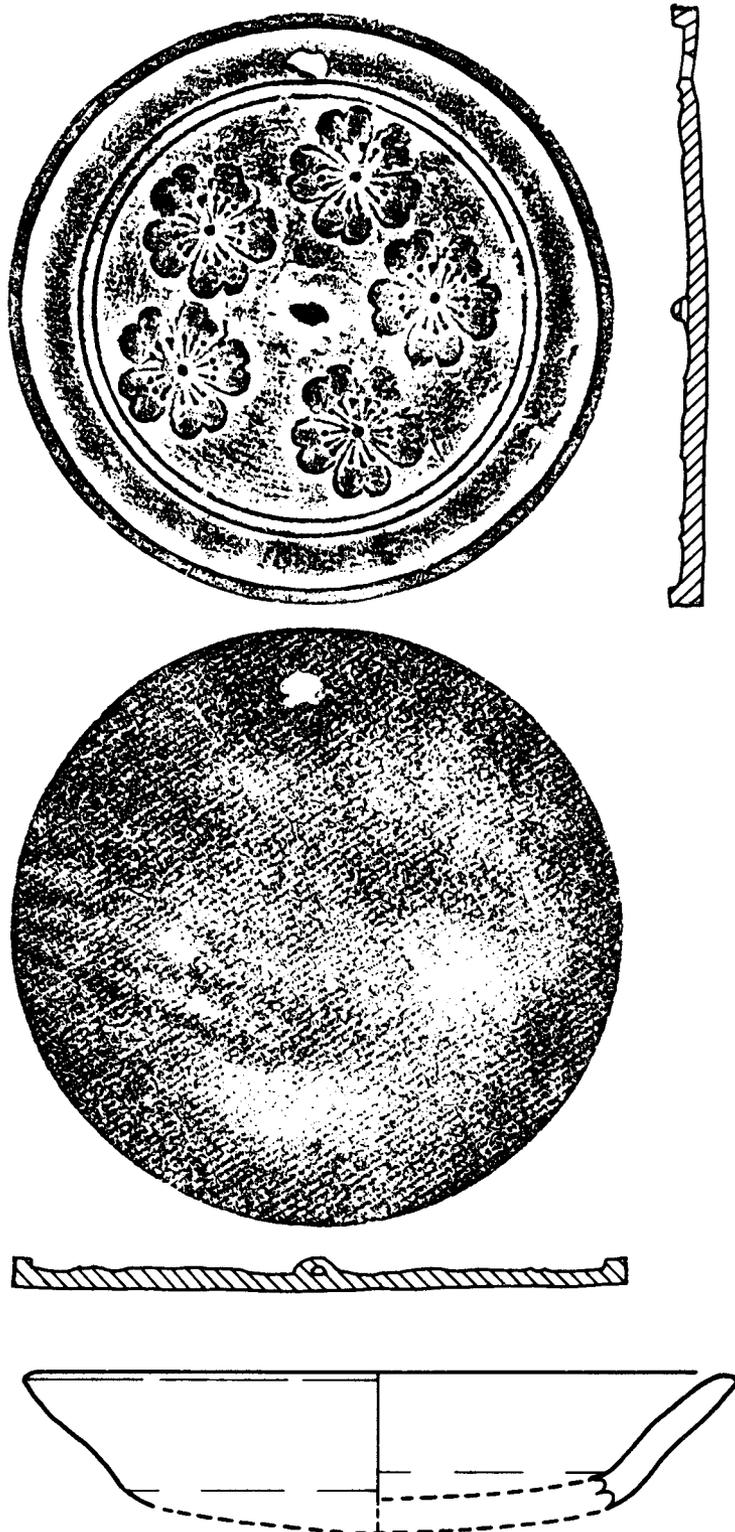
掘調査により検出された礫の分布状態および、調査前の実測図から判断すると直径約13mの円形プランに復元され、塚の最高レベルは15.05mとなる。裾の平坦部とは約90cmの比高差を測るが、平野部からの見かけの高さはそれ以上の印象を与える。塚の東側斜面の観察では、地山（黄色砂質粘土）を30cm程度削り出し、塚の基盤を整えていた。塚の盛土は砂質の黒色土と地山の混ざった灰褐色のサラサラした土で、多くの礫を含んでいた。礫は地山にも含まれている輝石安山岩とみられたが、特に塚の東側と南側斜面に多く認められ、礫が集中して存在する状況から、この礫が削り出された塚の基盤の上に黒色土と同様に集められたものであると判断した。礫の大きさは不揃いで、鶏卵大から人頭大のものまで様々であった。礫は第1号塚南東部裾の第2号塚との間の黒色土中のかなり浅い部分（表土腐植層直下）にも集中して認められ、この地表で唐川氏によって鉄鎌1点が採集された訳であるが、この地点からやや頂部に寄った礫を含む黒色土中から土師質土器小片1点が出土している。なお、第1号塚の頂部では攪乱を受けていた箇所もあって施設等は確認されなかったが、頂部近くに根元での径約20cmのタブの木1本がそびえ立っており、地元の古老達によって信仰の対象となっていた。塚の発掘時にはこれに先行して生えていた大きなタブの木の切り株も確認しており、第1号塚がいわゆる杜信仰に関係して造られた塚である可能性を指摘しておきたい。

**第2号塚** 第1号塚南東部裾に接して第2号塚が位置し、裾の一部を重複している。2基の塚の切り合い関係は第1号塚裾部を第2号塚の盛土が切っており、第1号塚の後に第2号塚が造られていた。しかし、地山整地後に盛られた小さな礫を含む黒色土が両方の塚に共通してみられることから、第1号塚築造後まもなくして第2号塚が築かれたと判断される。第2号塚の規模は5m×4mの楕円形を呈するが、南西裾部が崩れており、本来は直径約5mの円形プランであったと推定される。平面規模の割に高さは低く、約40cmを測る。盛土は柔らかい砂質の黒色土で、含まれている礫の量が第1号塚のそれと比較して格段に少ないという差がある。塚の調査では何ら施設は発見されなかったが、マウンドの直上で和鏡が採集されており、盛土である黒色土が均一であること、地山面は平坦で人工的に整地されたと判断できることから、信仰の対象として築かれた塚であることは、疑いない。

**その他の塚** 第7図に今回の発掘調査区外に存在する塚も含めて実測図を掲げた。第1号塚からみれば南東の方向——久麻加夫都阿良加志比古神社境内・参道の方向へ分布している。一応3号塚から10号塚までの8基としたが、塚そのものの規模がそれ程大きくはなく（最大で第5号塚の約6m）、塚の盛土そのものも20～50cm程度と低いため、その規模や形態も必ずしも正確に押さえたとはいえない。（図ではとりあえず円形の塚として扱っておいたが）ただ、神社境内地から台地の先端まで踏査をくり返したが、当該地にのみ特別に地表の凹凸が認められるのであり、複数の塚が存在していることは、確実である。

(2) 出土遺物（第9図、図版12・13）

**和鏡** 第2号塚マウンド直上で、唐川氏によって採集され、現在は久麻加夫都阿良加志比古神社に保管されている。唐川氏によれば、鏡面を上にして約半分が土に隠れた状態で発見されたということであり、現われていた部分にのみ細かい錆がみられる。錆あがりも良く、遺存状態は



第 9 図 熊甲神社遺跡 出土和鏡、土師質土器（原寸）

極めて良好である。径 8.1cm、厚さ 3mm、重さ 80g を計測する。鏡背の中央に 6mm×3mm の素鈕があり、鈕の孔径は 1.5mm と小さい。鈕をとり囲んで五個の桜花文が配置され、縁から 1cm 内側に 2mm の間をおいてめぐる二条の圈界によって内区と外区に区分されている。鈕と五個の桜花文の周囲では若干の錆崩れがみられるが、桜花の文様は、花卉、蕊房ともに鮮明である。外区に 3.5mm×2.5mm の小孔が、鏡面の方から打ち抜かれており、打撃によって若干の歪みを生じている。穿孔部を紐で吊って鏡を懸仏として再利用したものであり、第 2 号塚が信仰や祭祀の目的で造営された遺構であることを示している。鏡背文様からすれば本例のように文様が単純化し、五個の桜のみが存在する例を知らないのであるが、一応室町時代後半頃の所産としておきたい。

**鉄鎌** 前述のように第 1 号塚南東部裾西側の地表面で、唐川氏によって採集されている。発見された時点では、幅 4cm、刃わたりの現存長約 15cm を計り、ㄣ形に二カ所で押し曲げて、二度と使用できないような状態にされていたという。発見時点ですでに相当錆びていたが、現在までの年月の間に亀裂が進行し崩壊してしまっている。しかし、氏の説明のように押し曲げた状態の一端は観察することができる。

**土師質土器** 第 1 号塚の南東部裾西側の鉄鎌出土地点よりやや墳頂部へ上った所での黒色土中から出土した。わずか 1 点の小片であるが、口径約 13.5cm に復元計測できる。明るい褐色を呈し胎土・焼成ともに良好である。器面は良く撫でて調整されており、底部外面は弱く凹んでいる。資料も小さく、石川県内における土師質土器編年に対比するには、危惧を覚えるのであるが、中世でも最も新しい段階、室町時代後半頃の所産としておきたい。

## 第 5 節 熊甲神社遺跡についての考察

### (1) 縄文時代の土壇群と出土遺物

本遺跡では、縄文時代中期中葉の土壇が 8 基確認された。調査区では遺跡の縁辺部の一部を調査したにとどまるが、第 1 号土壇からは 1 点の磨製石斧と 12 点の打製石斧が、土器とともに一括の状態出土した。調査を担当した筆者の不手際から、出土状態の詳細な記録も取れず、本書作成直前に遺物の一部を紛失し、図示することができなくなるなど、誠に反省の極みであるが、この事実について再度触れ、まとめとしたい。

第 1 号土壇の石斧の出土状況について、橋本澄夫氏は次のような意見を述べられている。<sup>(1)</sup> やや長文になるが関係箇所を引用したい。「橋本がかつて唐川会員の案内で踏査したことのある中島町西谷内 A 遺跡では、土器量に対しておびただしい数の中形打製石斧が採集されていたが、ここでも同形同質の石斧で占められており、石斧の製造地ではないかとの印象をもったことがある。」(中略) 熊甲神社遺跡の「1 号土壇出土の打製石斧が西谷内 A 遺跡出土品と極めて良く似ているのであり」(中略) 熊甲神社遺跡の「石斧一括出土は、献納・貯蔵・隠匿など特殊な目的をもった埋納事例とみている」とされたのである。すでに本文中に触れたように本県でも石斧の一括出土例は、縄文時代後期後葉の野々市町御経塚遺跡の例があるのみである。一括して発見された 7 点の打製石斧は、いずれも欠損してはいない。同様な一括出土の例は、現在までのところ

全国的にも少ないのであり、山本直人氏の教示によれば、住居跡内あるいはその周辺で複数の打製石斧が一括して出土した例は、県外でも京都府桑畑下遺跡例など数遺跡の例が知られているが、熊甲神社遺跡第1号土壇例のような土壇からの出土例はほとんど皆無に等しいとのことである。住居跡内や住居跡の周辺から一括して出土した打製石斧の報告例では、破損した石斧を含むことが無いようであり、石斧の保管の状態を示すと理解されている<sup>(2)</sup>。本遺跡第1号土壇の石斧の全てを知ることが出来ないため、検討するには不十分であるが、第2節(2)でも説明したように欠損した打製石斧を数点(現在のところ5点)は含んでいるのであり、完形は各1点ずつの磨製石斧と打製石斧にすぎない。また、図版7右下に示したような剥片が10点以上出土しており、第1号土壇に石斧を貯蔵したと見るのは難かしいと思われる。さらに破損した石斧を献納や隠匿することも考えられない。結局、橋本氏の意見とは異なるのであるが、西谷内A遺跡の多量の石斧をみられて「石斧製造址」ではないかとの氏の感想をヒントにし、また、藤 則夫氏の石器圏の分析を参考にして、第1号土壇の石斧製造時に破損した石斧を剥片とともに埋納するような行為の結果ではなかったかと考えている。完形の2点以上の石斧を含んでいるが、破損した石斧や土器とともに土壇内に棄てられたと見るのである。筆者の想像の世界に入り込んだようであり、確たる根拠もないが、事例の増加により検討されると期待したい。

## (2) 中世の塚と出土遺物

本遺跡で発掘調査を実施した2基の塚とその東南部に現存する8基の塚群は、中世熊木院の惣社である熊甲神社と関係の深い遺構であると考えられる。調査を実施した第1号塚は地山を削り出した上に多量の礫が集められていた。黒色の盛土が認められ、塚南東部裾の地表で折り曲げられた鉄鎌1点が採集され、盛土中からは土師質土器片1点が出土している。塚は復元径約13m、高さ約0.9mの規模をもち、墳頂部近くにタブの木が存在していた。特に施設は認められなかったが、土師質土器片から室町時代後期頃に築造された遺構であると推定した。第2号塚は第1号塚に接して位置するが、第1号塚に後出する塚であった。復元径約5m、高さ約0.4mの規模をもち、特に施設は認められなかったが、墳頂から懸仏に転用された和鏡(五桜花文鏡)1面が採集されている。和鏡の型式および第1号塚との層序比較から、第1号塚と同様に室町時代後期頃に築造された遺構であると推定した。

さて、この2基の塚が築造された目的が、熊甲神社に関係した信仰や祭祀にかかわるものであったことは、懸仏(御正体)とした和鏡と押し曲げられた鉄鎌が一点採集されたことから明らかであろう<sup>(3)</sup>。県下の塚を分類された垣内光次郎氏は、本遺跡例を「盛土の上に奉斎施設を伴う塚」と区分されたが<sup>(4)</sup>、まさしくその通りであるといえよう。なお、本遺跡の塚の信仰や祭祀を考える上で第1号塚頂部近くに存在したタブの木の存在は示唆的である。能登ではこのタブの木(学名はイヌグス、亜熱帯系の樟木科の常緑樹で巨木に成長する。)は神聖視されてきた。地元の人々も第1号塚のタブの木を以前は参拝することがあったと伝えており、この木を神聖視していたのである。小林忠雄氏によれば、能登半島の各所にタブの木信仰とも言える信仰が伝えられており、タブの木に鎌を打ち込む神事を伴う例もあるという<sup>(5)</sup>。熊甲神社遺跡で採取された鎌をもってこれに結びつけるのは、やや早計であるが、本遺跡での塚群がこのタブの木を神聖視する信仰と関

係した可能性もあるのではないだろうか。

**註**

- (1) 橋本澄夫「中島町宮の前熊甲神社遺跡の調査」石川考古第103号（昭和51年）
- (2) 山本氏の御教示によれば桑飼下遺跡例の他、東京都栗山遺跡、北海道白尻B遺跡では一括の状態で石斧が出土しているという。
- (3) 和鏡を懸仏に利用した例は、県内でも能登島町祖母ヶ浦石塚遺跡出土鏡がある。
- (4) 垣内光次郎「女郎塚遺跡発掘調査報告」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』所収 石川県立埋蔵文化財センター（昭和57年）
- (5) 小林忠雄「能登の漂着文化と民俗―タブの木伝承における南方系要素―」歴史手帳第11巻5号（昭和58年）

## 第Ⅲ章 土 川 遺 跡

### 第 1 節 遺跡発見と調査の経緯

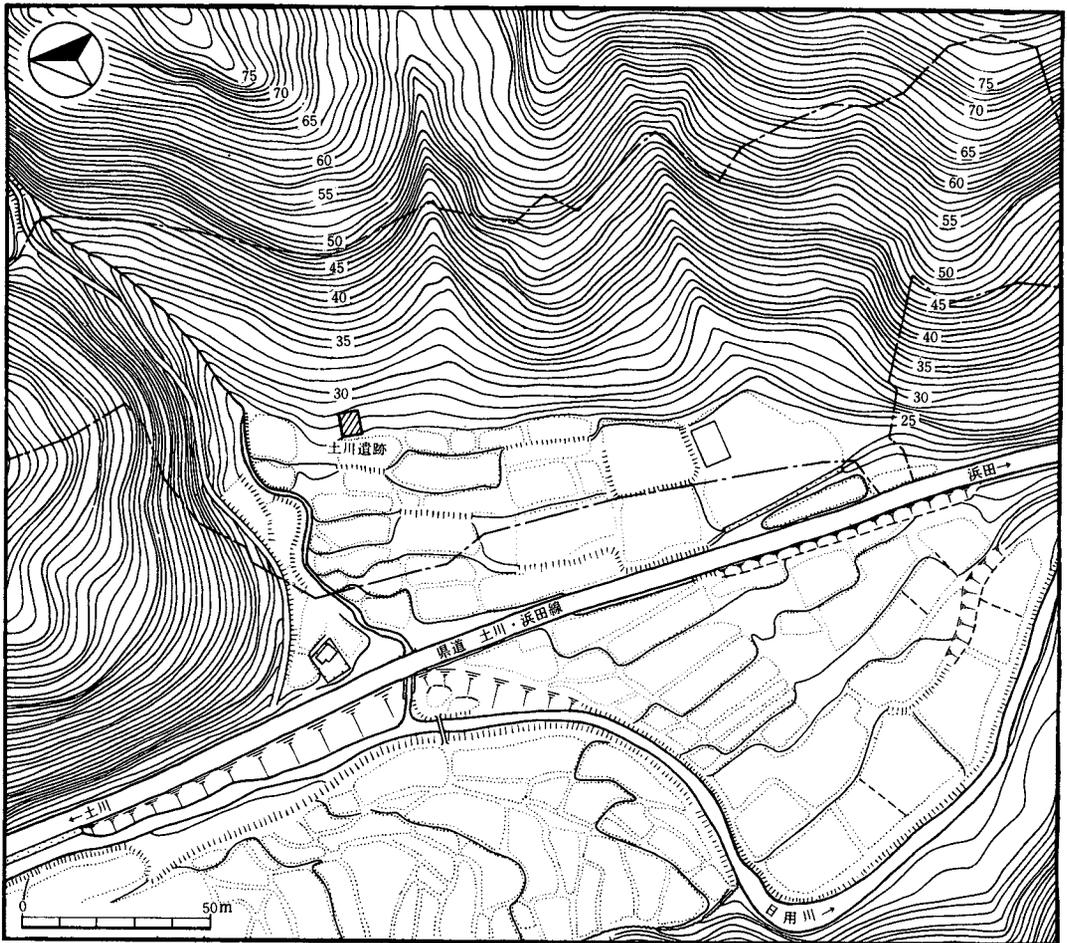
土川遺跡は、能登半島の総合開発の一大プロジェクトとして、能登海浜道路と接続する能登縦貫有料道路（羽咋市柳田～穴水町此木間）の建設工事により、昭和49年10月に不時発見された新遺跡である。昭和55年（1980）3月、石川県教育委員会刊の『石川県遺跡地図』では、遺跡番号6038番として掲載されており、遺跡の所在地は、鹿島郡中島町字土川イ之10番地であった。

土川地区は、七尾湾西湾の最西端に注ぐ日用川中流域に臨む小盆地に立地した農業地帯で、人口340人程の集落を営む。遺跡は土川地区の東端、「端出」の集落から南々東へ約250mの所で、中島町と富来町を結ぶ県道土川・浜田線の東側、標高26mを測る丘陵西側斜面の下段に立地していた。

土川遺跡が発見されたのは、前述の如く能登縦貫有料道路の建設工事が当該地で着手された昭和49年の秋で、有料道路の路線が決定された後に実施された県教育委員会文化財保護課による分布調査時にも発見されていなかった。工事開始にあたり、路線敷内の樹木の伐採が行われた時点になって、初めて地表に石室らしい大きな石があり、石下の一部が開口しているとの報告が、唐川明史氏より（10月28日）文化財保護課にもたらされ、職員が現地確認におもむいた。（図版Ⅰ—①参照）その時の調査によれば、日用川東側に南北に延びる水田の一段上の丘陵斜面に長さ80cm程の石材が露出し、その石の下に小さく開口部が認められた。このため、何らかの遺構の可能性があると判断し、有料道路課（当時）とその保存について協議を行うことになった。協議の結果、有料道路課もこの石室状の遺構を遺跡として認めたが、工事着工にかかっており、その段階では路線の計画を変更することは、不可能であるとの結論を得た。文化財保護法の規定に基づく遺跡発見通知及び埋蔵文化財発掘通知等の手続きをとり、事前の発掘調査を実施して記録保存を図ることで双方が合意した。これにより、有料道路課から昭和49年11月18日付けで遺跡発見通知が提出され、さらに同年11月22日付けで同じく有料道路課と県教育委員会から、埋蔵文化財発掘通知が文化庁へ提出された。発掘調査は工事の都合により緊急を要したため、同年11月30日から文化財保護課主事高橋 裕と同塩川義雄（いずれも当時）が担当することとなった。悪天候についての調査であり、調査が終了したのは、暮も押し詰まった12月21日であった。

### 第 2 節 遺 構 （第10・11図、図版14～17）

発見された遺構の一部（露出した天井石らしき大石）は、発掘調査に協力していただいた端出集落の人の話によれば、当該地が開墾された時（昭和初年頃）にはすでに石の一部が露出しており、その一部を掘ってみたが何も出ないのでそのまま放置しておいたとのことであった。調査前の状況では、墳丘らしきものは認められず、また、付近一帯にも同様な集石地は認められなかつ

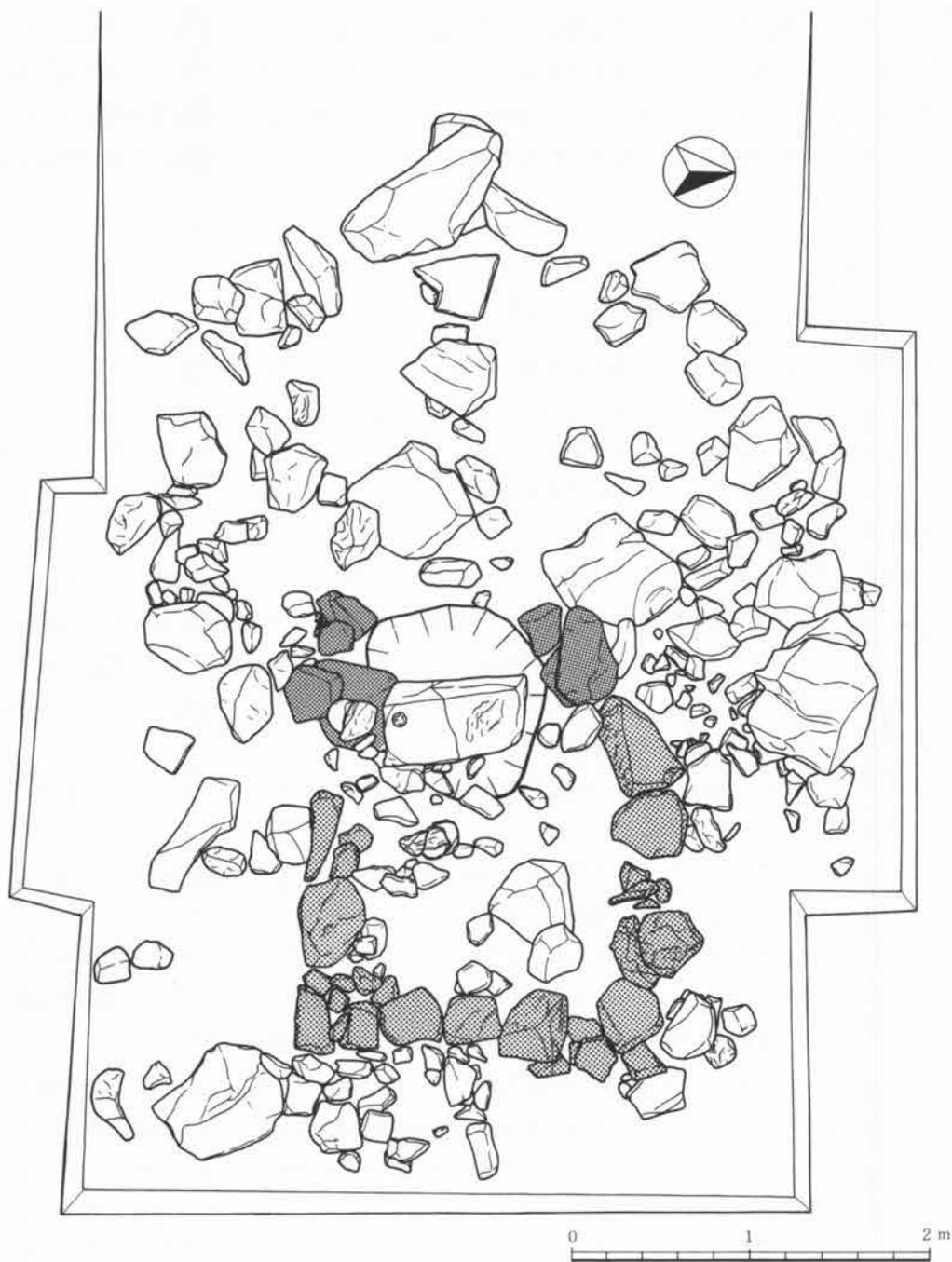


第10図 土川遺跡 調査位置図

たので、遺構としてはこれ一基のみが存在するものと考えられた。このため、調査にあたっては、折からの降雪期に向い天候の悪化が予想されたので、当該石室状遺構の上にプレハブ小屋で覆いをかけることから始め、南北5m、東西7mの範囲を調査区として表土の除去を行った。

薄く堆積した表土を取ったところ、ほぼ方形をなして石材が配置された石室状の遺構が検出された。その平面プランは、配置された石端から石端まで西側で2.1m、北側で2.5m、東側で2.0m、南側で2.7mをそれぞれ測り、東西に主軸をもつ長方形プランと判明した。また、当初石室の天井石の一部とも考えられた露出していた石は、石囲いの西側にあたり、しかもその石の下部には長径（東西）1.1m、短径（南北）1.0mの盗掘穴（開墾時に試掘された穴と推定される）があって石列の西端からやや内側に寄った位置（元の石囲いより約60～70cm東側）にあるところから、原位置より動かされた可能性が高く、また、遺構自身がいわゆる古墳の石室ではないことから、これが天井石とはとうてい言えないことが確認された。

石室状遺構の平面プランの特徴として、北西隅の部分がやや狭められていることがあげられる。石囲い列は、西側が前述の盗掘のためか残存していなかったが、現存する石組みは、丘陵中にある自然石を組み合わせたもので、西側を除くいずれの面も一段だけが残されていた。石組みが二



第 11 図 土川遺跡 石室状遺構平面図

段以上に重ねられて組み合わせられたものかどうかは不明であった。しかしながら石組みの付近には多量の石材が散布しており、これが開墾時に破壊されたものであるとすれば、二～三段に積まれた可能性も十分にあると思われる。石囲いの内側は、大石が数個（調査時には3個、しかし、南西隅には無く、動かされた可能性もあるのでそれ以上）が置かれ、全面を覆うような状態であった。これらの石を取り除いた下は地下面まで約30～40cm程掘り下げられており、覆土中には細かい炭化物が認められたが、土器片あるいは珠洲古陶片などの遺物は全く検出されなかった。本遺跡からの出土遺物としては、南西隅の石列外側にあたる巨石の下から、灯明皿の破片とみられる土師質の土器小片が1点検出されただけであった。

### 第3節 遺跡の性格

調査の結果から明らかな通り、遺跡の性格を直接的に示す材料は得られなかった。しかし、本遺跡の特徴を要約して列記すれば次のようにまとめられる。

1 遺跡は、日用川に臨む丘陵西側斜面の下段に立地しており、台地や丘陵の頂部に位置していない。従って立地としては全く視覚的効果のない場所にある。1基単独で存在し、類似する遺構が集中するような存在形態はとらない。

2 遺構は、自然石を長方形プランに配列した石室状の構造をもつ。規模は長辺が2.5mと2.7m、短辺が2.0mと2.1mを計測する。石組みの一部はすでに失われており、残存した石列も一段のみであるが、付近に分布する多量の石材からみると二段以上に積まれていた可能性もある。

3 石室状の石囲いに大型の石を載せた天井部が存在したかどうかは、明らかでない。石囲いの内部は地山面まで約30～40cm程度掘り込まれていた。

4 石囲いの内部からは何ら遺物の検出はなかったが、石列の外側で土師質土器小片1点が出土している。

5 遺跡の築造年代は、上記の土器小片からは決め難い。しかし、中世以降の築造になることは、この土師質土器が示している可能性<sup>(1)</sup>がある。

本遺跡のような調査例は、県内ではこれが初例であり<sup>(2)</sup>、また、県外においても類例は多くないと思われる。資料的にも乏しく、その性格について記すことも難しいのであるが、土師質土器から中世以降の築造になるという前提に立って、わずかばかりの推定を試みたい。

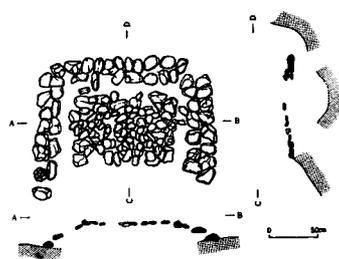
石室状遺構の石囲いが二段以上に積まれ、天井石が存在しなかった場合は、まず、石室状の土壇ではないかと考えたい。最近でも鳥越村鳥越城跡や鶴来町白山町遺跡などで調査されたような貯蔵施設の目的で造られたとみるのである。本遺跡の立地条件を考慮すれば、これも可能性があるとみたい。同様な構造であっても、長方形のプランをとる石囲いが一段のみであった場合は、内側に遺骸を埋めた墳墓であったと考えることも可能である。長方形の石の区画は墳墓の区画を示している。類似の例は中島町上町マンガラ中世墳墓群や小松市軽海中世墳墓群にある。上町マンガラ遺跡<sup>(4)</sup>では、標高約20mの低丘陵に立地し、掘り切りによって画された幅25m、長さ24mの墓域を造り出している。墓域内は、切土、盛土によって二ないし三段の段状になって更に区画さ

れ、最高位には径5 m、高さ1 mの塚が置かれていた。墳墓は、「拳大から人頭大の石で方形区画を造り、一辺の長さが約2 mを測る規模で計画的に造られ」その中に珠洲焼の壺などを蔵骨器として埋置してある。墳墓の形態は、方形区画とする他に、「石棺状に板石を長方形に組み合わせるもの、小石を盛り上げるもの、石囲い炉状に小さく骨を囲むもの、小ピット（穴）上に板石で蓋をするもの、土壇墓、ピットなどの多様性が知られ」<sup>(5)</sup>ている。同様に軽海中世墓でも丘陵斜面に四段からなるテラス面を造り、配石を伴う墳墓群が構築されており、21号墓址では1.5m×1.3m、22号墓址では1.9m×1.5mの方形に河原石を配置していた。以上のように中世の墳墓にあつては石を並べて方形に配したり、石で方形に囲って墳墓を画すことが行われていたようで、土川遺跡の石囲いも組み石が比較して大きいという点を除けば、構造的には以上のような墳墓と大きな共通点をもっているとみられるのである。

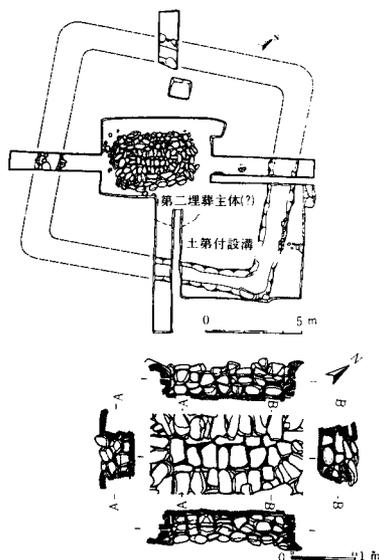
石室状遺跡の石囲いが二段以上に積まれ、天井石が存在した場合は、いわゆる石柩のような構造となる。この場合はやはり墳墓とみるべきであろう。<sup>(6)</sup>構造的には異なるが、中世においても富山県朝日町柳田古墓のように、古墳時代の竪穴式石室に酷似した構造をもつ墓も存在するのであり、<sup>(7)</sup>これから類推すれば、あながち無理な事もないように思える。

最後に、あくまでも可能性の問題としての構造をあげれば、石室状遺構の石囲いが二段以上に積まれ、天井石も存在して、盗掘により失ったと推定した西側の石列が築造当初から存在しなかった場合が考えられる。すなわち、古墳時代の横穴式石室と同様な構造である。この場合の築造目的としては、貯蔵施設あるいは物置として利用する場合と、墳墓として構築される場合があったと思われる。前者はいわゆる石室であり、後者は県内でも調査例の増えてきつつある中世の横穴状遺構に関係して行くような気がしている。

確たる概拠のないまま、土川遺跡の性格について述べてきたが、現時点では、やはり本遺跡の性格は中世墳墓の一類型とする可能性は高いものの伴出遺物も僅かなことから今後の資料の集積と研究の進展に期待するところが大きい。なお、最後になりましたが、寒風の中、調査に協力を頂いた土川地区の皆様及び調査事務所を提供していただいた有料道路建設課（当時）に対し、厚く御礼申し上げます。



第12図 軽海中世墓第22号墓跡  
(拠：『軽海中世墓址群』)



第13図 柳田古墓 (拠：『富山県朝日町柳田遺跡柳田古墓緊急発掘調査概報』)

## 注

- (1) 土師質土器片は紛失のため、図示できない。石室状遺構を中世以降の所産とする確たる根拠をもっているわけではなく、可能性のみを指摘しておきたい。
- (2) 初例としたが、これは土川遺跡調査時の昭和49年段階のことであり、その後類似する遺構として昭和52年度に能都町藤波二ツ屋1号塚の調査例がある。  
浅田耕治『能都町藤波二ツ屋1号塚・波並堂の上遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会（昭和53年）
- (3) 西野・東四柳『鳥越城跡』石川県鳥越村教育委員会（昭和54年）
- (4) 西野秀和「中島町マンガラ中世墳墓群をめぐって」『日本城郭大系7新潟・富山・石川』所収（昭和55年）
- (5) 小村・室山『軽海中世墓址群』小松市教育委員会（昭和48年）
- (6) 当然、マウンドの有無も重要な要素になってくる。唐川氏の御教示によれば、土川遺跡の石室状遺構には確実にマウンドが存在したということであり、この点から再吟味する必要がある。マウンドが伴えば、能都町藤波二ツ屋1号塚と極めて類似する。
- (7) 橋本・岸本・山本『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概要』富山県教育委員会（昭和50年）



遺跡周辺の航空写真（上—昭和52年，下—昭和59年）



調査区全景（西より）



調査区全景（南より）



調査状況



1号塚遺景（北西より）



久麻加夫都阿良加志比古神社



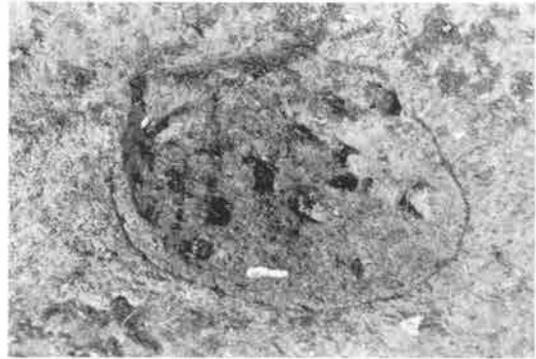
調査区全景（南西より）中央に縄文土壇群、台地先端に1号塚をみる



調査区全景（北東より）縄文土壇群を臨む



調査状況



第2号土坑検出状況



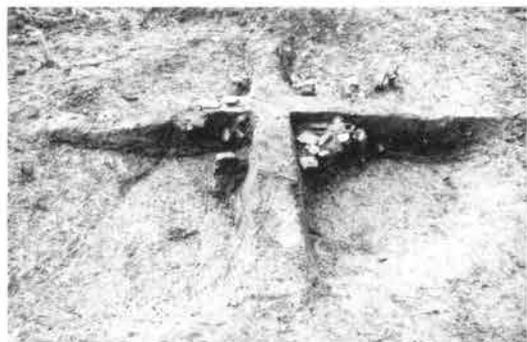
土層断面



石皿出土状態



土坑群 (手前より第3・4・5号、7・6号)



第1号土坑全景



第1号土坑遺物出土状況（北東より）



第1号土坑遺物出土状況（南東より）



第1号土坑完掘状況



第2号土坑



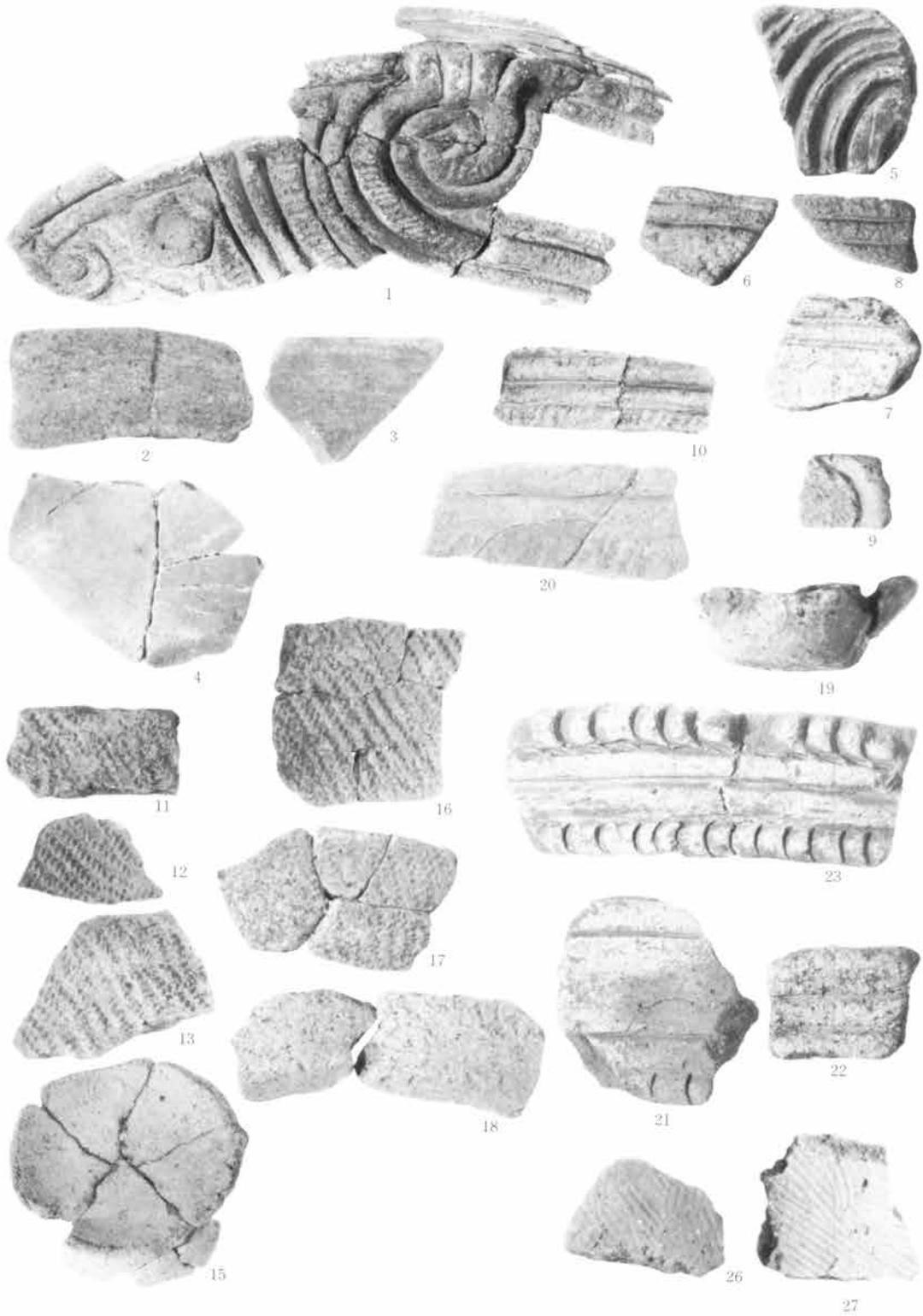
第2号土坑断面



第2号土坑完掘状況



第6号土坑（南より）



出土縄文土器 (縮尺不同・番号は第5図に一致)



出土石器（磨製石斧・打製石斧・石皿・剥片・番号は第6図に一致）



第1号塚全景（伐栽前のタブの木がみえる）



第1号塚（北東より）



第1号塚全景（北北東より）



第1号塚（西より）



第1号塚発掘時の状況（手前第2号塚・南東より）



第1号塚にみられる礫（南東より）



第1号塚にみられる礫（東より）



第1号塚(東より)



第1号塚調査状況全景



第2号塚の断面



第2号塚（ピンボールの所で鏡発見）



第2号塚



第2号塚と磔（1号塚より臨む）



第2号塚断面



その他の塚群



その他の塚群



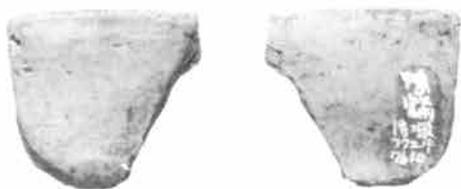
五桜花文鏡（上一鏡背、下一鏡面）



鏡・鎌出土地点



鉄鎌（上—面、下—面）



土師質土器（左—表、右—内面・実大）



発見時の状況



確認調査



清掃時の全景



発掘状況



石組み検出状況



石室状遺構（北より）



石室状遺構（西より）



石室状遺構全景（南より）



石室状遺構全景（西より）

中島町宮前熊甲神社遺跡・土川遺跡  
能登海浜・縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

発行日 昭和60年3月

編集・ 石川県立埋蔵文化財センター  
発行者 金沢市米泉町4丁目133番地

印刷者 北国書籍印刷株式会社  
金沢市泉本町2丁目155番地